

「市民セナリヨ」2022

2022年5月7日(土)

浦上キリシタン資料館

長崎と韓国カトリック教会

～ 朝鮮カトリック教会ブラン司教 (Mgr Blanc) の

大浦天主堂における叙階について ～

はじめに；

ブラン司教について

BLANC, Marie-Jean-Gustave (1844～1890) 朝鮮名：白圭三

1844年5月6日 Reugney 生 (ブザンソン教区)

リヨンの大神学校で学ぶ。

1864年10月 パリ外国宣教会に入会。

1866年12月22日 司祭叙階

1867年2月15日 朝鮮に向けて出発

朝鮮で起こった丙寅迫害(1866年)のため朝鮮に入国できず、満州教区(Mnadchourie)の岔溝(Tcha-keou, Notre Dame des Neiges)到着し滞在。

第6代朝鮮教区長リデル司教と共に何度か朝鮮入国を試みるが成功せず。

1876年2月；日朝修好条規(江華島条約)調印。

1876年5月 リデル司教、ドゥゲット神父と共に朝鮮西海岸の大清島に到着(リデル司教は岔溝に戻る)。

以降、朝鮮国内で活動し、釜山(日本人居留地)と長崎を結ぶ連絡ルートの構築に努める。

1879年 寺島宗則外務卿の協力で釜山を通じた連絡ルート(釜山～長崎～岔溝)が確立する。

1881年 リデル司教、海外拠点を岔溝から長崎に移すことに決定。
(自身は病気のため、香港で療養するも、結局、フランスに帰国。)

1882年7月 ブラン神父、司教に任命される。

1883 年 7 月 8 日 大浦天主堂でプティジャン司教により司教叙階

(1884 年、朝鮮教区第 6 代教区長リデル司教の死去により、第 7 代教区長となる)

1890 年 2 月 21 日 ソウルで死去。

1. 岔溝 (Tcha-keou, Notre Dame des Neiges) 滞在期

1866 年；丙寅迫害

幼年の国王高宗に代わって実権を握っていた父親興宣大院君が主導。

様々な矛盾を抱えた王朝体制の立て直しを強力に推進。

その一環として、思想統制（天主教は正統朱子学と相いれない邪教で、儒教的価値観を崩壊させると恐れる）、ならびに對外攘夷（天主教徒が外国勢力を引き入れようとしていると懸念）を推進するため、對天主教弾圧を断行。数千名が死亡したとされる。当時朝鮮で活動していた宣教師 12 名のうち 9 名が殉教し、リデル (Ridel) 神父ら 3 名が朝鮮国外に逃れる。

満州教区ヴェロール司教により岔溝 (Tcha-keou) 滞在を認められ、現地の中国人信者の司牧を行いながら朝鮮入国を試みる。

第 6 代朝鮮教区長リデル司教と共に何度か朝鮮入国を試みるが成功せず。

例 1) 1874 年、駐清国フランス公使ジョフロワに協力を要請。

北京にやって来る朝鮮使節団に信教の自由を要請する陳情書を託そうとし、ジョフロワ公使に相談。ジョフロワ公使が清国側に働きかけるも協力を拒否される。

例 2) 1875 年、海路で朝鮮入国を試みるも失敗。

2. 朝鮮国内での活動

ブラン神父による長崎・釜山連絡ルートの構築のための取り組み

1876 年；リデル司教、ブラン神父、ドゥゲット神父が朝鮮入国に成功。

リデル司教は、釜山に戻る。

1877 年 10 月；リデル司教、ドゥセ神父と朝鮮入国。

1878 年 2 月；リデル司教、官憲にとらえられ、ソウルに収監。

駐清フランス公使（Brenier de Montmorand）、駐日フランス公使（Geofroy）が駐在国政府にリデル司教の釈放のための工作を依頼。

日本側では寺島宗則外務卿が朝鮮のカウンターパートに書簡を送り、宣教師を釈放するよう要請。しかし、結局、駐清フランス公使の依頼を受けた清国政府が朝鮮政府に要請し、リデル司教が釈放される。

この時、リデル司教の釈放をめぐって、朝鮮国内のブラン神父が釜山の日本領事館にコンタクトを取ろうとするも失敗。

長崎・釜山連絡ルートの構築

1879 年 5 月；リデル司教の日本訪問

ブラン神父から長崎を通じた釜山との連絡経路構築の提案を受けて。

駐日フランス臨時代理公使バロワ（Balloy）を通じて寺島宗則外務卿に会う。

リデル司教の日本滞在中、朝鮮でドゥゲット神父（Deguette）が逮捕、収監される。

釜山近隣に住む朝鮮人がドゥゲット神父の逮捕・収監をプティジャン司教に伝える。

→ 釜山から長崎への情報伝達が可能になっている。

ブラン神父がドゥゲット神父の逮捕・収監を在釜山日本領事館の山之城管理官に書簡で伝える。→ブラン神父が在釜山日本領事館と接触できるようになっている。

釜山から東京に戻った山之城がドゥゲット神父の逮捕・収監をリデル司教に伝える。

リデル司教が寺島外務卿に対し、日本と朝鮮間（長崎・釜山間）で確実な書簡・物資のやり取りができるように協力を依頼したところ、日本側は釜山の日本公館で便宜を図ってくれ（Mgr Ridel : Evêque de Philipopolis vicaire apostolique de Corée / Piacentini, 1890）、長崎・釜山間の確実な連絡網が確立。

→1879年12月、リデル司教がパリ本部に送った書簡に、“日本を通じた朝鮮内部との連絡網が新設された”と報告。

1879年12月；ブラン神父がリデル司教に、朝鮮国内の宣教師との書信連絡のため、日本人信者の商人を東萊に常駐させることを提案。

長崎のロケーニュ司教（Locaigne）とリデル司教との書信連絡のためには、従来の邊門を通じた陸路よりも長崎・釜山ルートを実確な連絡網にする必要があると提言。

日本人信者の東萊常駐についての提案は、プティジャン書簡からもうかがえる。

プティジャン司教の香港事務所ルモニエ所長宛て 1880年3月29日付け書簡
“朝鮮のブラン神父は、私たちが釜山を通じて送った全ての物品を確実に受け取ったようです。特に、ミサワインと聖香油は喜ばれたようです。ブラン神父は、私たちとより確実に連絡が取り合えるように釜山に日本人信者を常駐させることを望んでいるようです。この件については、リデル司教に伝えているに違いありません。”

1881年4月のリデル司教書簡（香港のルモニエ所長宛て）；

“邊門を通じた朝鮮との連絡方法はあまりにも危険なので放棄した状態となり、書信連絡については長崎・釜山ルートを通じて行うつもりである。”

1881年7月24日付のリデル書簡（香港のルモニエ所長宛て）；

“朝鮮教会の Procure（経理部）を設置する件につき検討するため、長崎に行くつもりである。”

1881年8月のリデル書簡（パリ本部宛て）；

“あらゆる書信連絡は釜山を通じて行われているので長崎に拠点を設置してコスト神父（Coste）に委ねることに決定。ただし、これまで拠点としてきた満州の岔溝も当分の間維持する。”

3. リデル司教による海外拠点（岔溝）の長崎移転計画とコスト神父の長崎滞在

リデル司教、岔溝を離れ長崎に常駐する計画を立てるが、病気（脳卒中）のため、フランス帰国を余儀なくされる。

長崎に朝鮮教会の経理部を設置し、会計責任者としてコスト神父（高神父）を滞在させる。

リデル司教が長崎に常駐するつもりであったことをうかがい知れるプティジャン司教の書簡

上海事務所マルティネ所長宛て 1881 年 10 月 20 日付け書簡

“三菱（郵船）でポワネル師（Poisnel）を私たちのもとに送ってください。リデル司教様が、ここ長崎のご自分のそばにいてくれることを希望しているからです。…司教様は長崎から朝鮮と連絡が取れるとの希望をお持ちです。少なくとも今の満洲と同じくらいの容易さで。ポワネル師にリデル司教様の要望をお伝えするのは所長様です。フランスから朝鮮宣教地用に届いた全て物品を携えて長崎に来るように伝えてください。”（この後、リデル司教は香港へ行き、病気療養することになる。）

上海事務所マルティネ所長宛て 1881 年 12 月 5 日付け書簡

“リデル司教が健康を回復して長崎に戻って来てくれることを願っています。満州（岔溝）よりもここ長崎のほうが、はるかに容易に朝鮮教会を統率できるでしょう。”

コスト神父の長崎滞在と撤収

コスト神父は長崎に来る前、横浜で韓佛字典、La Grammaire Coréenne の出版、教理書・祈祷書の印刷に従事していた。

1882 年 2 月 13 日付コスト神父の香港事務所ルモニ工所長宛て書簡；

- ・長崎における朝鮮教会の経理部
- ・釜山に日本人信者と朝鮮人信者を置いており、釜山との連絡のためにも、今後は長崎が連絡通信の中心地（拠点）になる。
- ・引き続き印刷活動を行うつもりであり、契約を結んだ日本人が朝鮮語の活字を鑄造している。

当初、コスト神父はプティジャン司教らと共に司教館に居住。

プティジャン司教のルーセイユ総長宛て 1881 年 11 月 21 日付け書簡；
“長崎の司教館にコスト神父、ポワネル神父、4 人の朝鮮人神学生が滞在している。”

その後、浪の平山手二十六番地に移る。

1882 年 11 月 6 日付コスト神父の香港事務所ルモニエ所長宛て書簡；

- ・司教館の近くに家を借りた。

「外国人居留地名簿」に、コスト神父、ドゥゲット神父、ポワネル神父、
ジョス神父の名前が見える。

- ・朝鮮のプラン神父から 4 殉教者の遺骨が送られてきた。

プティジャン司教が保管（1894 年まで）。

- ・印刷所が稼働を始めた（祈祷書・教理所の印刷）。

1882 年 11 月；ドゥゲット神父が釜溝を出発し、長崎に来る（釜溝から完全撤収）。

1883 年 4 月；ドゥゲット神父とポワネル神父、長崎から朝鮮へ（仁川上陸）。

ジョス神父（趙神父）は、当時、健康状態が万全でなかったため同行できず。

案内人として、神学生の深堀丑松（1887 年 2 月 13 日に司祭叙階；
深堀忠治）が仁川まで同行。

1883 年 6 月；プラン司教が朝鮮から来崎。大浦天主堂で司教叙階。

叙階式に参列した朝鮮人信者ヨハネ金起浩（キム・キホ）によれば、
“プティジャン司教様が主司式者となり、…叙階式を進行したが、その
美しく聖なる様は筆舌に尽くしがたいほどであった。プラン司教様は
金の冠をかぶり、金の杖を持って聖堂内を進まれ…聖堂の外で与った
者は、信者でない者を合わせて約 3 千人に及んだという。”

その後、長崎に経理部と印刷所を置く必要性がなくなったため、プラン司教の指示によりコスト神父は長崎を離れ、朝鮮に入国（1885 年 11 月 8 日；朝鮮に到着）。これで、朝鮮派遣の全宣教師が朝鮮にそろったこととなった。

4. ブラン司教の叙階式について；金起浩『奉教自述』の記述より

『奉教自述』とは、ヨハネ金起浩（キム・キホ）（1824～1903）が1901年3月に記述した書で、自身が受洗した1854年から1901年までの47年間にわたる信仰生活を回顧しながら叙述した自叙伝的な記録。

※ 漢文原文 14 面～15 面（ブラン司教の叙階式関連箇所の仮訳）

リデル司教が清国でお亡くなりになった後、教皇の命（1882年7月）によってブラン神父様が日本の長崎大聖堂で司教叙階を受けることになったが、これが癸未年五月望間（陽暦1883年6月19日）のことであった。

私は呉致玉（オ・チオク）と共にブラン神父様に付き随い、済物浦（仁川）から蒸気船鎮西丸に乗り、6日後に長崎に到着した。長崎は済物浦から水路で約5千里（朝鮮の10里＝4km）という。まず、呉致玉が上陸して朝鮮館の聖堂に行って到着した旨を告げると、コスト神父とジョス神父が文フィリポを連れてきて迎えてくださった。済物浦から一緒に来た上海領事館に勤務している信者のヨセフが、まず大浦天主堂へ行き、ブラン神父様と一緒に来た理由を告げると、プティジャン司教様は喜んで迎えてくださった。その後、陽暦7月8日の聖エリザベトの祝日に朝鮮司教の叙階式を行う旨、電信でロケーニュ司教様をはじめ全ての司祭にお知らせになった。

叙階式当日、ロケーニュ司教様と他の司祭たちが集まって大ミサを捧げた。プティジャン司教様が主司式者となり、ロケーニュ司教様と司教の代理のコスト神父様がプティジャン司教様の左右に随って叙階式を進行したが、その美しく聖なる様は筆舌に尽くしがたいほどであった。ブラン司教様は金の冠をかぶり、金の杖を持って聖堂内を進まれたが、聖堂を埋め尽くした司祭や神学生たちは司教様と向かい合ってお辞儀をした。聖堂の外で与った者は、信者でない者を合わせて約3千人に及んだという。

コスト神父様とジョス神父様、そして李ミカエル、金トマ、文フィリポ、崔ルカ、朴

パウロが居住するフランス人の舎館に行ったが、家賃が年 120 圓だそうだ。塙の内側には良い井戸や果樹があるので、住みながらにしておいしい果物も味わうことができる。ささやかな喜びといえよう。

私はプティジャン司教様に対する感謝の念を抑えられず、祝賀者として司教様の前に進み出て、賀表（祝文）と律一篇（漢詩一篇）、それから朝鮮から持参した虎皮一枚といくつかの品物をお渡しすると、司教様はとてもお喜びになった。そして、賀表は居所の壁に掛けることにしよう、虎皮は、日本の腕の良い彫刻師に生きた虎のような目を彫らせ、椅子にかぶせて鑑賞することにしようと話された。

ある日、その日はプティジャン司教様の誕生日（1829 年 6 月 14 日）だということで、朝鮮人信者 5、6 名が訪ねて行ってお祝いを述べ、祝福を受けた後、いくらかの金銭をいただいたこともあった。その頃、ブラン司教様と東京のオズーフ司教様が親しい間柄だということで、3 回も電信で通知してお会いすることになった。そうしてブラン司教様はコスト神父様と一緒に蒸気船に乗って同月 10 日に長崎を発たれたのだが、その際、ブラン司教様が私に、「毎日、ジョス神父に朝鮮の実情や言語についてしっかりと教えるように」と命じられた。ある時、ジョス神父様が五倫の意味をお尋ねになったので、私は五倫について 26 句で解釈した歌を作って差し上げたところ、ジョス神父様は数日間勉強した後、その意味を知り、とても素晴らしいと話された。

ブラン司教様はコスト神父様と一緒に東京で一ヶ月余を過ごされ、陰暦 7 月 12 日に大阪から戻ってこられた。その翌日は聖母被昇天の大祝日（陽暦 8 月 15 日）であったので、8 時半に司教様は大祝日のミサをお捧げになった。そのミサは非常に荘厳で美しかった。ミサにあずかった信者が数千人で、聖堂の外で参列した人々の数はわからなかった。

ある日、ジョス神父様と一緒に舟に乗って浦上村の大聖堂へ行ったが、信者の戸数は約千戸で信者数は五千人にのぼるという。

陰暦 7 月 28 日（陽暦 8 月 30 日）、上海行の蒸気船があると急に知らせが入ったので、ブラン司教様とジョス神父様の旅支度を終え、その日の 8 時に乗船した。